

板碑と六面石幢



普濟寺保存の板碑群（昭和41年） ※平成7年の普濟寺本堂の火災により罹災

■板碑

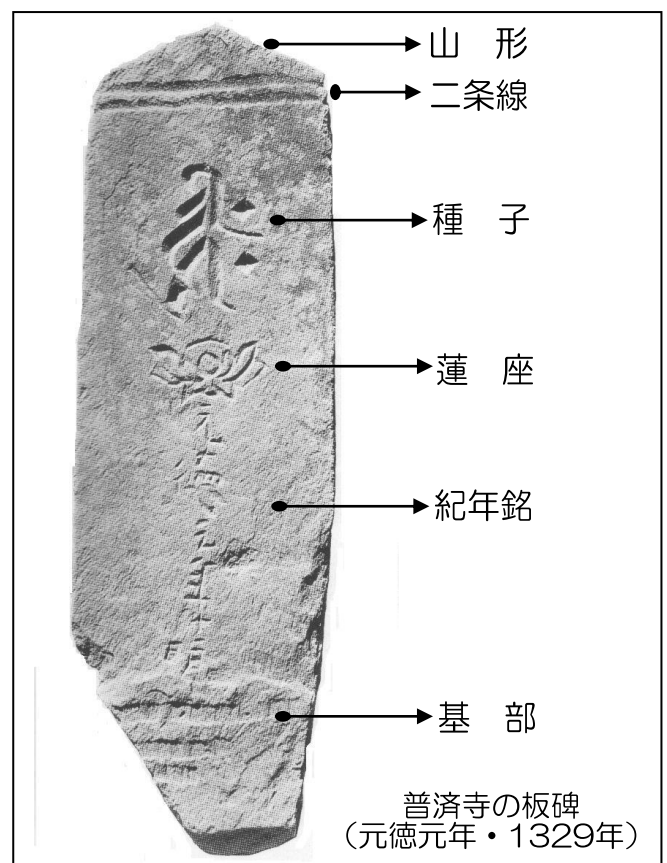
板碑とは死者の追善や生前の供養のために建てられた塔婆の一種です。関東地方では緑泥片岩（秩父青石）が用いられています。青石塔婆ともいわれ、鎌倉時代初期から室町時代後期に建てられました。

初期のものは、武士や僧侶らによって建てられたものが多く、時代が下がるとその風習は庶民層にまで広がってきました。

供養の対象となる本尊を、仏像や梵字の種子で表し、その下方に願文、願主名、年紀などを刻んだものが多くみられます。

■六面石幢

六面石幢は、立川市内唯一の国宝で、柴崎町四丁目の玄武山普濟寺に保存されています。普濟寺の開山・物外和尚の弟子である性了によって南北朝時代の延文6年（1361）に建



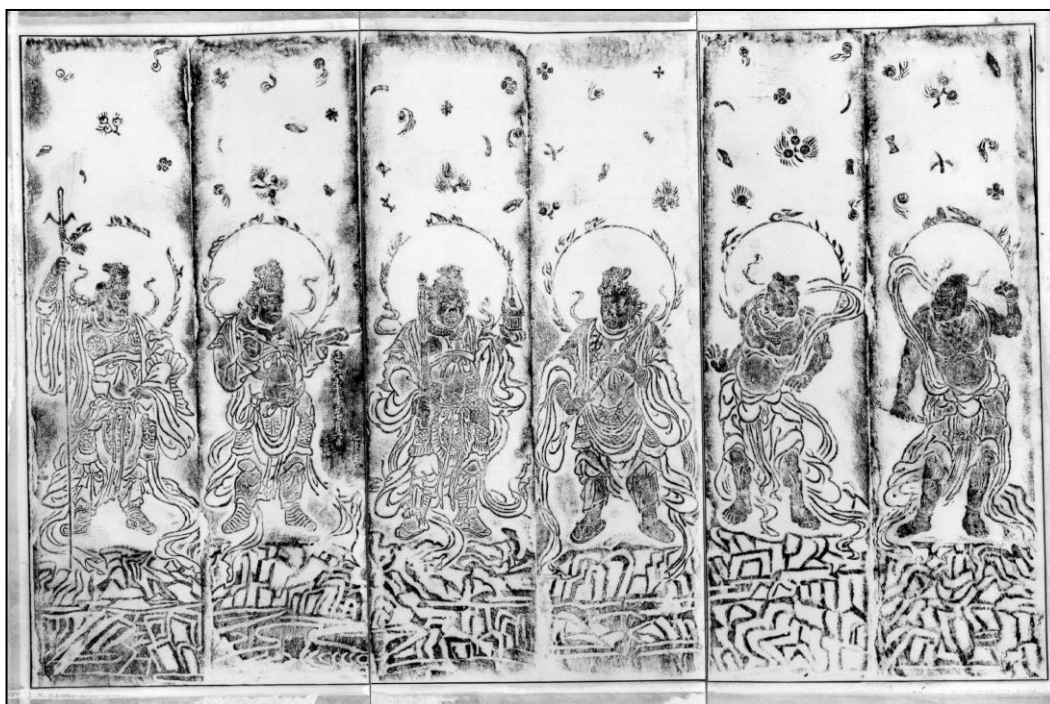
てられました。高さ 166cm、幅 42cm、厚さ 9cm の緑泥片岩(秩父青石) 6 枚を六角に組み合わせ、その上に六角形の笠石と宝珠がのせられています。6 面のうち、2 面には仁王像、4 面には四天王像が刻まれており、寺の安泰と信徒の繁栄を願って建立されたものと考えられています。



■六面石幢の彫刻

四天王は仏教の守護神です。*須弥山の中腹にある四天王天の四方に住み、仏法を守護しているといわれています。甲冑姿で武器をもち、邪鬼を踏みつけている姿をしている場合が多く、国土安全、五穀豊穡などにも重要な役割をもっています。増長天は南方の守護神で、矛を所持しています。

広目天は西方の守護神で、左手に巻物、右手に筆を所持しています。多聞天は北方の守護神で、右手に剣を持ち、左手の掌に宝塔を乗せています。単独でつくられる場合は、毘沙門天と呼ばれます。持国天は東方の守護神で、右手で持った剣を構えています。



増長天 広目天 多聞天 持国天 吽金剛 阿金剛

仁王は金剛力士とも呼ばれ、四天王同様に仏法を守護しています。寺門や須弥壇の左右に安置されることが多いようです。阿金剛像は口を大きく開け、吽金剛像は口を閉じています。阿吽とは息の出入りのことで、「阿吽の呼吸」は息が合った様子をいう言葉として一般でも使われています。

※須弥山 仏教の世界観で、世界の中心にそびえ立つという高い山